

ブルーベリー 次に生産が大きく拡大する国はどこか

Blueberries Consulting 2025年12月1日

成長はもはや単に栽培面積の増加だけに依存するのではなく、適切な場所で栽培し、理想的な遺伝的品種を選び、益々要求の厳しい市場に向けてプレミアムな果実を届ける物流条件を確保することが重要となっている。

過去20年の間に、ブルーベリーは世界でも最も活力に満ちた作物の1つとなった。かつては北半球の「特産」果実であったが、現在では世界中のスーパーマーケットに並び、年間を通じて入手可能な世界的農産物となった。健康、風味、利便性というその有望な特徴は、機能性があり栄養価の高い食品を重視する新世代の消費者に完全に共鳴した。しかし、この無限と思われた拡大は、次の段階に入った。もはやこの産業がどれだけ成長するかではなく、どこで成長するか、誰がその成長を主導するか、世界の生鮮果実の生産と輸出の様相がどのように変化するかが問われている。

静かな再分配

今起こっていることは、世界における栽培の静かな再分配である。今日の拡大の動きを主導している国々は、10年前に統計上トップだった国々とは異なる。新しい地域、新しい投資家、そして新しい品種が全く異なる景観を形作っている。世界的な消費は依然として増加しており、特にアジアが牽引しているが、業界は転換点に差し掛かっている。そこでは、単なる栽培面積の増加ではなく、適切な場所で高性能な品種を栽培し、プレミアムな果実を益々要求の厳しい市場に届ける物流条件を整えることによって成長が達成される。

高い要求水準

他の果実とは異なり、ブルーベリーは凡庸を許容しない。リンゴやブドウでは多少の欠点が許されるかもしれないが、ブルーベリー、特にプレミアム品では、歯ざわりの良い食感、バランスの良い甘味、完璧な果実の状態が、妥協の余地のない要求事項である。この消費者の期待の変化が、世界のどこで生産を拡大するかの決定に影響を与え始めている。もはや土地と水だけでは不十分であり、今日では適した気候、市場への近さ、最先端の品種、それに数千マイル先の食卓まで品質を維持できる輸送環境が必要である。

これは、アフリカが最も成長の可能性の高い大陸として浮上している理由の1つである。10年前には象徴的な存在に過ぎなかったが、現在ではモロッコと南アフリカが衰えの兆しを見せない波の先頭に立っている。

例えばモロッコは、温暖な気候、確保された労働力、競争力のあるコスト、官民の連携、そしてヨーロッパに非常に近いという、ほとんどの国が該当しない条件を兼ね備えている。ロンドン、パリ、ベルリン等の主要市場へ72時間以内に果実を届けられることが最大の強みである。この物流の優位性が、同国を鮮度と安定性を求めるヨーロッパの投資家と世界企業の新たなお気に入りに変えた。多くの業界関係者にとって、モロッコはもはや新興の供給国ではなく、ヨーロッパのプレミアムブルーベリー市場における確固たる存在である。

南半球の台頭

同様の状況は南アフリカでも見られるが、規模がより大きく、出荷期間も異なる。同国の多様な気候条件は、ヨーロッパで競合が少ない時期のブルーベリー生産を可能にし、同国からの輸出は世界の供給の重要な要素となっている。さらに、戦略的立地により中東と東南アジアへの効率的な供給が可能である。南アフリカは、次のシーズンに同国を最も影響力のある供給国の1つに押し上げる評判を、いつの間にか築いている。

その北に位置するザンビア、ジンバブエ等は、国際企業に牽引され、技術的に進んだプロジェクト、プレミアムな品種、及び急速な成長を既に示している。数年前にはブルーベリー地図に存在しなかったこれらの国々は、現在では多くのアナリストが「アフリカブーム」と呼ぶ現象の一部となっている。アフリカ大陸は、10～12年前のペルーと同様に、周辺の生産国から世界的な主要国への劇的な飛躍を経験している。

ペルー 長寿の巨人

アフリカが加速する一方、中南米はそれとは異なるものの同様に重要な段階にある。ペルーは豊富な労働力に支えられた集約的かつ技術的に進んだモデルによって世界最大の輸出国となったが、その拡大は減速している。水不足、塩害、新たな気候問題が、同国を品種更新に焦点を当てた選択的な成長へと向かわせている。ペルーが今後も巨人であることに疑いはないが、過去の爆発的な成長ペースは維持されないだろう。

一方、メキシコは異なるサイクルにある。世界最大の市場である米国への地理的近接性及びそこと結ばれた物流は、比類のない優位性を提供する。この市場に数時間で新鮮な果実を届けられる国は他になく、その鮮度は高価格と消費者の鼻につながる。したがって、量の多さではなく、より歯ざわりの良い品種やより大きなサイズといった品質、そして同国を北米市場における「モロッコ」として確立する立地条件によって、メキシコの拡大は継続するだろう。

チリは利益を出せるか

チリは、品質面の変革の最も興味深い事例の最前線である。かつてブルーベリーの先導者であった同国は、新しい品種と市場の要求の高まりによって古い品種が陳腐化し、競争力を失った。しかし過去5年間で同国は集中的な変革を進め、既に成果を上げている。それは、新しい品種、より高度な栽培管理、そして中国、米国、ヨーロッパ向けプレミアム果実への徹底的な集中である。チリは、栽培面積においてではなく、今日最も重要な指標である1kg当たりの収益において、再び成長するものと見られる。

他方、アルゼンチン、コロンビア等の他の中南米諸国は、前進のペースはより緩やかであるが、品質と差別化されたニッチ市場への明確な取組みが見られる。

食欲旺盛なアジアの巨人

アジアでは状況が全く異なる。そこでは成長は内部的なものである。中国は現在世界最大のブルーベリー消費国であり、生産の拡大は膨大な国内市場を満たすためだけに進められている。雲南省、山東省、遼寧省等には最新の産地があり、その多くは保護された品種と最先端の技術を用いている。この成長は国内供給を変えるが、少なくとも今後10年間は世界の輸出市場で競うことはないだろう。他方、インドは緩やかに進んでいるが、その人口と多様な気候により大きな潜在力を持つ。

東欧での拡大は、拡張主義の野心よりも必要性によって推進されている。それは、欧州連合向けに重要な時期に新鮮な果実を供給することである。ポーランド、セルビア、ウクライナ、ルーマニア、ジョージア等の国々は、物流上の近接性によってスペイン、ポルトガル、モロッコと直接競争できるため、栽培面積を増加させている。この成長は今後も着実に進むが、アフリカほど爆発的ではないと見られる。

誰が未来を主導するのか

世界が優位性を競い合う中で、ブルーベリー栽培は再び世界の果実生産の景観を塗り変える新しい領域へと移行している。仮に2025年から2035年までの次の10年間のブルーベリー生産の成長を地図化するならば、その中心は明らかにモロッコと南アフリカが先導するアフリカにある。米国市場を支配し続ける不可欠な2本柱としてメキシコとペルーがあり、チリは戦略的再設計により再び品質によって輝くであろう。中国は自国の消費専門の内向きの巨人であり、東欧の新興勢力は東となって地域の供給を強化する。

いずれの場合もルールとなる1つの共通の要素がある。未来は量ではなくプレミアム品質にある。成長する国々は最も多く栽培する国ではなく、歯ざわりの良い品種、しっかりした果実、優れた風味、長い収穫後寿命、完璧な物流チェーンを備え、最もうまく栽培した国々である。世界市場はもはや「ブルーベリー」に対してではなく、「感覚的体験」に対して対価を支払うのである。